# 令和五年度　第五回串本町短歌大会入賞作品

## 特選

○ カイロスの打ち揚げ近し熊野灘老いら夫婦がエビ網をひく　清水　円

○ 背を丸め妣（はは）が作りしさんまずし秋刀魚来ぬ海見つつ偲びつ　村詰　真紀子

○ 逆縁の級友（とも）に掛けやる言の葉を模索しつづけ一日の過ぐ　上田　明子

## 秀作

○ 恐竜の卵かと問う幼子や春の球根植えつつ我に　吉田　洋子

○ ３００円入れましたよと声に出し無人売場に花を選びぬ　中西　みよ子

○ 知らぬ間に古書肆なくなりビュンビュンと車ばかりが行く大通り　田林　和子

○ 込み合える枝切るごとく整理して君は私に答を返す　奥澤　典子

○ 初旅は兵士と共に引き揚げ船祖国の土を踏みし二歳児　奥村　文子

## 佳　作

○ そのために死ねる仕事を見付けし日親子の縁を切ると言われき

樋口　勉

○ シェークスピアあの強烈な生き方を味わいたくて図書館に寄る

清水雅昭

○ ふるさとは荒磯（ありそ）のつづく枯木灘風が風よぶ風の町なり

池中健一

○ 耕作地狭めてなおも田畑打つ花の傘寿は泥んこなりき

強瀬忠昭

○ 戸籍簿を頼りに立ちし屋敷跡名水滴る父の故郷

田中掬代

○ 色褪せし守り袋を手にしては持たせし母の心偲ばる

石垣実男

○ いたわりつゆっくり芋掘（いもほ）る老夫婦（ろうふうふ）、傍（そば）でかすかにジンジャー香（かお）る

松下昭子

○ 人の世に何か疑問のあるらしくしきりに首を傾げる雀

小山睦美

○ 何事も気分が乗らぬこんな日は歳を理由にのんびり過ごそ

米津りつ枝

○ 茶摘み唄谷間に流れしころ遥か荒草に埋まる茶の花の純白

引地貞子